

袍」とある。「纏」はからむしの綿入(衾著)、「袍」は衣のなかわた著あるものをいふ。川柳の句にも「わんばうで背中かくと女宿いひ」など見えてゐる。

わんば 兩人共にわんばを脱げ、我が酒手にする(十二段) 身代もいしくなつてわんば一枚にはなつたれど(加増會枝)

「わんばう」ともいふ。「わんばう」(纏袍)の配。「わんばう」を見よ。

# ゐ

**\*ゐあひ** ひらりと抜いたる居合の早業、神木の松を相手取り木刀翳し、跳上つて聲をかけ(國性爺)

兩方りきむ居合腰、太刀の柄も摧けよと握りひしぎ(烏帽子折)

「居合」居ながら敏速自在に刀を抜き差し、敵と立合ふ劍術の一派。合類大節用集、書解門に、「居合」劍術、林崎重信未派也、又謂之利方。人倫訓蒙圖彙卷二に、「居合は太刀討の根元なり、兵法といふは敵に向つて太刀をあはするは腰より抜出しての上也、抜かずして兵法あるべからず、然れば抜くを第一とす、長短の打物によつて抜きやう品々あり、又は所の置状地形の高下と坐したると立ちたるとあり、敵に其色をさくらせず柄に手をかくるより、抜出す速速によつて勝負の二道ここにあれば、いかでか學ばずしてあらんや、諸流多き中に開口流其名高し」とありて、坐して右膝を立てて長刀を抜いてゐる繪が載せてある。

「居合腰」とは、坐して右膝を立てて居合の身構へする腰付をいふ。

**ゐがん** 十二の槍、十二の投、立がん、居がんで、強みの腰(井筒)

「居股」相撲にて、給十二手の一である。うたちがん」を見よ。

**\*ゐぎやう** 天上に現はれ出で、異形は手を伸べ、檢非違使が居合を割れて退けとばたと打つ(二枚摺)

「異形人」と異なる形の義。鬼または妖怪の類をいふ。

# ゐ

**\*ゐまきやく** いらぬ化粧業、何ともゐまきやく千萬といへば(國性爺)

「通格」不都合。書言字考節用集に、「通格、格別格式也、見「離原抄」、又用「通却字」。和訓栞に「ゐまきやく、通格といへり官府語なり、通却にあらず、通格の字海東語圖記に見ゆ」

**ゐくびにきる** とつばい頭の黒塗兎猪頸に着なす(川中島)

「著猪頸」兎を仰ぎて載くやうに被るをいふ。猪頸は猪の如く縮頸の義。

**ゐげん** 「んげん」を見よ。

**ゐづくみ** かういへば忠兵衛を憎みそれむかうなれど、ゐづくみぞあの男が身のなる果がかばい(冥途飛脚)

「居謀備る」に於ては神佛の冥罰を蒙つて、忽ち身動きもなす居謀みとなることもあるの意で、自警の詞である。當世大和言葉(著者及詳ならぬ)慶安から)に、「人と雑談しける時寛文頃の間の作か)に、「人と雑談しける時かりそめごとにも、佛頭、天道、神八幡、氏神照覽、ゐづくみ、みしやり、此火に焚きせられらぞ、などおそる敷言する事はなはだよからぬ事といへり云云」。

**\*ゐだいけぶにん** 一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟を得。ゐだいけぶにんの無上恩にあやかり給へ母上様(百日會枝)

「章提希夫人」梵名 Vaidhi、譯して勝妙身などといひ、摩訶陀國、頻婆娑羅王の后で阿闍世太子の母である。太子の爲に牢獄に幽閉されて佛法を求め、釋尊乃ち親臨されて夫人の爲に説法された、親無量壽經これである。委しくは親無量壽經に於て見よ。

**\*ゐだてん** 黒谷の東岸和尚衣の袖をまくりあげ、章駄天の如く飛來り(天經師)

「章駄天」梵名 Veda、章天將軍ともいひ、略して天神ともいふ。甲冑を著して直立し、兩手で寶劍を捧持してゐる。淨行を修して佛法を外護し、利生化益を主として群生を濟ひ給ふ。嘗て足疾鬼が佛舍利を奪うて逃走した時、これを追及して取戻したといふので、疾走の神として世に知られてゐる。

# ゐ

**ゐづつこのまろがたけ** (本領會枝)

「まろがたけ」を見よ。

**ゐづつこのせん** 昔の井筒の女とやらは、妬のほむらに提子の水が湯となつた(天經師)

「井筒女」ひさげの水が湯となる」を見よ。

**ゐて** 樋の口の井手の水草のみなぎつて(卯月紅葉)

「井手」樋手の義。杭を打つて水を塞ぎ止める所。堀。

**\*ゐてん** 大織冠といふ冠を脱がせ、位田の所領を取上げ(大織冠)

「位田」一品から四品まで正一位から從五位に至る、その位の者に給せられた田をいふ。大寶合によれば、一品八十町、二品六十町、三

品五十町、四品四十町、正一位八十町、從一位七十四町、正二位六十町、從二位五十四町、正三位四十町、從三位三十四町、正四位二十四町、從四位二十町、正五位十二町、從五位八町と見えてゐる。これ等は時代によつて變遷がある。

**井戸へつられた大黒天** (雪女)

「ねらうてん」を見よ。

**\*ゐれうかつがう** 皆南無阿彌陀佛とひれ伏してゐれうかつがう申しけり(井筒)

「阿彌陀佛」阿彌はとりかむこと、「退仰」は佛法に對して俯仰恭敬の念を起すこと。法華經「普賢品」に「阿彌陀佛、阿彌陀佛」。書言字考節用集に「阿彌陀佛、義楚六帖、周圍曰阿彌、坐曰阿彌」。

# ゐ

**ゐのきはかけ** 横に難ぐる切先、金吾が膝節猪の牙かけ、これも尻居にどうど居て(井筒)

「猪牙掛猪の牙に掛つて跳ね飛ばされたやうな負傷の意にいらうたのである。

**\*ゐのこ** やがてゐのこ、や五六里、十死も過ぎて(天經師) 一昨年の十月中の亥子に火燧明けた祝儀とて(天經師)

「亥子」亥猪とも書き、十月亥の日の稱、古來北斗の斗柄が亥に向ふといふによつてこの稱がある。上の亥の日の亥の刻に亥子餅を食ひ又火燧を明けるなどの慣習がある。但言集覽に「初亥は順集に十月初の亥の日右大臣女御の火桶にもちひをもとりて内裏の女房につかはすと見えたり、祭中にて嚴重の餅といひ、俗に支焼と稱すと年中行事にいへり、愚案今俗十月初亥に火燧を明くも是より起る歟」。巢林字は火燧の明け初めを十月初亥日

でなくて中の亥日にせるは、その作、傾城戀物譜にも「承平二年十月中の亥の日、民間には亥の子と名付け、大内にはお支猪の御祝儀として云云」と書いてある。大經師普賢のこの文は「亥の子」と「子」のこゝに往來即ち道理をひかけたのである。

**ゐのじ** 肩にのかるもの花折りかけて、猪にゐのじが寝た所(蛙合戦)

「猪字」猪をいふ。猪を猪の字といふことは、ほれる(體)をほのじといふの類である。「ほのじ」を併せ見よ。果林子のこの文は、「かろるも」その條を見よと「ゐのじ」とうけたので、枯草に猪は古歌にも多く詠まれ、後拾遺集卷四の部、和泉式部の歌にも「かろるも掻き臥す猪の床のいやすみ、さこそ寝ざらめかからずめがなしと見えてゐる」「肩にかろるもの花云々」をも見よ。

**\*ゐのはやた** 源三位頼政とは小性立、猪俣太とは行合兄弟(雪女)

「猪俣太」名を高直(或云廣直)といひ、源三位頼政の郎等である。頼政御殿の上なる欄を射落し、猪俣太これを刺殺した。

**\*ゐはい** 忠孝にことよせて位牌知行に膝を屈むる臆病者(雪女) 白縮緬の紵帯、これも二人が申し受け、長き形見と身に附けん、我も受取る受取れと、位牌のひれに結び付け(卯月潤色)

「位牌」死者の戒名などを記した木牌。和漢三才圖會卷十九、佛供器の條に、「靈柩置釋氏戒名、安、佛齋傍、者、俗謂之位牌」。位牌知行とは、親類りの儀禮をいふ。西鶴雲、日本末代郷(貞享五年刊)卷四、祈る印の神の折敷の條に、「末末の侍親の位牌知行を取り、樂樂と其通りに世を差る事本意にあらず」。

「位牌のひれとは、俗に位牌の袖ともいひ、位牌の戒名を記してある面の兩側を少し前に折つて飾影りしたものをいふ。和漢三才圖會卷十九、佛供器の部、靈柩の條に位牌のひれある書が載せてある。「ひれ」に就いてはそれ條を見よ。

**\*ゐもり** 井守といふ蟲は夫婦の契り深き蟲、女たる身は手具足に持ちれば、思ふ戀が叶うてよい殿持つと承る(三世相)

昔は守官(古くは守は辨)を「いもり」といひ、守官を館下に丹砂を以て其體の赤くなつた時、これを掲げて女の身に塗り、交接のことあれはそれの塗つたのが剝落して、いもり故事を、後に守官を井守(井泉池沼に棲む蟲で)と誤り、根林子の時代既に井守を靈藥に用ゐたものである。增補下學集(寛文九)氣形門に「守官。本名は蟬也。取斷蟬、飼以丹砂、體赤赤時掲之、塗守官女之臂、若有三姓犯罪血酒、故守官也。古詩曰、臂上守官何日酒、鹿藿華落淚如雨、鹿藿宜男神也。齋藤彦齋撰、佛前後篇に「今世男女の中のことにつきて、水中のありるを黒糖に製するよし」とあるは蟬丸がへるなるべし。陶弘景云「蟬蟻喜蟬羅羅間、以朱飼之、滿三斤、殺乾末以塗守官人身、有交接事、便脫、不爾如赤蟬、故守官守云云」。

**\*ゐやひごし** 仲間へ入つて下されと、詞は下げてゐやひごし、いやと言はば切りかけんす氣色面に見え透りたり(博多)

「あひごし」(居合應)の詠「あひごし」を見よ。  
**\*ゐらん** 傾城は實物直段極まる上からは名古屋山三が妨言うても叶はぬ管、然るゐらん人に及ぶとは、

うねらもがりと覺えたり(反魂香) 娘おかめ舞與兵衛夫婦に譲り申候、外よりゐらん少しもなしし如件(卯月紅葉)

「連亂」法に違ひ亂す義、轉じて苦情を陳述することをいふ。書言字彙節用集に「連亂」。

**ゐりよう** 「り」の遺韻を見よ。

**ゐらわぢ** 「ら」の遺韻を見よ。

**ゐんげん** 「んげん」を見よ。

**\*ゐんのちやう** (松風)

「院」木上天皇及び女院に奉仕する役人を院司といひ、その役所を院の廳といふ。

ゑ

**ゑぐ** 萌ゆるゑぐ摘む若菜摘む(雪女) 妻は手足も土大根、蕪みくなくも摘み持ちて(最明寺殿)

「ゑぐな」といひ、野菜の名。和訓栞に「ゑぐ。萬葉集に蕪具と書けり、野菜の名なり、醜き哉成べし、ゑぐの若菜、ゑぐの若菜、ゑぐの若立、まに咲きて水邊に在り、芹に似たる草也といへり、今東國にてまはへといふ、上總の人はよこもいへりとぞ。俊賴はまことよめるを、仲實の返しには芹とよめり、新六帖に半夏又女萎をよめれどいふがし、今東國にて黒くゑるをまことといふともいへり。

**\*ゑざうし** 京童の口すきみ落首浴外とりどりに、其一ふした繪草紙や、下立賣を堀河へ引廻したる角

屋敷(女腹切) サア繪草紙を、よその口の端ア餘所ごとく買求めては慰みしこの身の果を讀賣に、誰が節つけて田舎まで唄ひ流さん蜆川(卯月紅葉)

「繪草紙」觸賣とも讀賣とも稱した。天災地變や敵討、葛藤の類や役者評判、情死、罪人仕置など、繪畫その當時起つた世上の珍聞異事を拙劣な繪畫に描き、小刻書をした所謂瓦版印刷物で、僅一二枚の粗紙の小冊子である。これを坊間に濡き歩いた者が即ち繪草紙賣である。力役働もならず、往時の華奢に引替へて見窄らしう公衆に面を曝すことも恥かしくして、深縮竝を被り二人連節に其文句を唄つて之を賣つた。彼等が全盛のその時は浮白紙繪の美女を待らしたたはけの限を盡し、浮世の榮華を樂んで底抜けの大騒ぎに學習した俗謡を、今は生活難の爲に其美聲を元手に節面白く可憐得意の咽をうならせ、幾多往來の人人を面白がらしたところであらう。井原西鶴撰の好色二代男(貞享元)卷之二、大並北國落の條に、「盃屋の七條八郎お兄郎は家も實に流れて、それより松屋町とやらに引込み、夜さへ編笠を着て連節の讀賣、うはがけさかれないと聞いて來た人もあり」と見え、人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)卷之三「論取紙賣。世上にあらゆるかはつた沙汰、人の身のの上の悪事、萬人のさし合をかへりみす、小歌につくりて遊民のしわざ、無きに事かぬ商人なり」とあるも、彼等が身の上の消息を語るものである。繪草紙の賣價は享保頃一枚物で三文、上下二枚物で六文程であった。亂歴三